

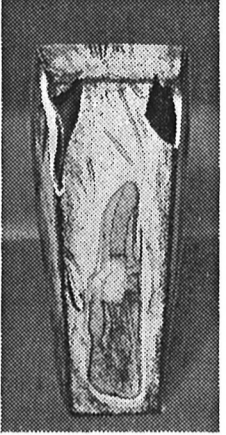
展評

確かな技術に支えられた線は、植物の葉を、茎を、想像物たる有機的塊(かたまり)を、精緻(せいじ)に写しとる。永津の「博物誌」は、そっと静寂ななかに置かれ、自閉する。

エッチング、石膏(せっこう)刷、コラグラフ、アクアチント、木版、石版。さまざまに試みられ、あるいは永津によって開拓された技法。タプローの二方向からの描く行為を、写しかえという版画法によることで、手の精密さ、モノを見る目のありかを見える。技法は、エッチングを主体とする。しかし「技法」表現に過ぎない。石膏がインクを「現」の間にある深淵(えん)に吸いこむ性質を利用して、銅版に、私は奇立(いただ)ちを「型取り」した

精緻な技法の世界

永津 禎三版画展



「printed object 84-3」(立体コラグラフ、石膏刷)

石膏刷。「立体」作品は、この石膏刷とコラグラフを組み合わせた永津の新しい試みという。紙の地にアクリル系の凹面に残った色素が表面に定着する。銅版の厚みが石膏を

ラフは、この下塗りのマチエをくりとり、そのくぼみにはルを利用したコラージュであエッチングの線が走る。「立体」に刻印された「版画の平面」。石膏の塊に定着した版面、石膏の塊に定着した版面、石膏で型を打てる。表面は、画といえよう。この一連の立コラグラフ、銅版の跡とエッチングという三重の版面を見せよう。作品が語りだすには、まだヒナ型といえる習作だが、版画の平面を立体へ移し、三重、四重にも刻印された版面の微妙な変化は、イメージの思いがけない結合を予感させる。

技法への執着は、エッチング作品に用いられた雁皮(がんぴ)紙やアクアチントによる均質のグレーな面を生み出す工夫にも見られる。枯れ葉、枯れ花、サンゴ：永津の見る静物は、死した有機物の静寂を漂わせる。コラグラフで作る「Specimen 1-88-1」や石膏刷にはめ込まれたエッチングの一群も、有機的形態が描かれる。この自動筆記風な作品は、永津のタプローへと一歩の距離にある。いやむしろ、これら有機形態から引き出されたイメージが、独特の線描による色面構成を見せるタプローへと収れんされていくのだろう。

作品は静寂を保っている。生の熱気ではなく、死の冷たさでもない。自らもまだ意思できないナニモノかである。永津にとって、普遍的な骨格を見つめなす作業であるのかもしれない。しかし、きつかけとしてのこれらの「静物」が、技法上の描く対象にとどまり、目的化した時、「静物」は語りだすことなく終わる。永津の静寂は、また禁欲の世界でもあつていよう。

(M) (永津禎三版画展) 23日まで、宜野湾市大山、画廊匠